

【氏名】翟 勇

【所属大学院】(助成決定時)

九州大学 人文科学府

【研究題目】

中日英の文処理比較から見た言語処理と言語理論の関りに関する研究:

第1言語獲得と第2言語習得の視点から

【研究の目的】

音形を持たない要素を含む文をどのようにして我々は理解しているのかに関して、従来二つの対立する考え方がある。一つは、解析器が言語知識を参照せずに文処理を行うという知覚方略の考え方である。もう一つは、解析器が言語知識を参照して空所を埋めるという透明性の仮説である。言語処理は言語知識を使わず、知覚方略のみで処理を行うという主張は心理言語学に大きな影響を及ぼすことになる。もしそれが正しければ、言語処理と言語知識はまったく無関係であることを意味する。しかし、言語処理のプロセスにおいて、言語知識を参照することにより、効率的な言語処理が可能になると考えられる。この二つの異なった観点をどのように統一させ、うまく解釈できるのかがまだ研究されていない状況にある。本研究では、第1言語獲得と第2言語習得のアプローチに基づいて、中国語・日本語・英語の空主語文処理を比較することにより、言語処理と言語理論の関わりを解明することを目指している。

【研究の内容・方法】

英語と日本語の空主語文処理の実験結果を再検討するため、新たに中国語の空主語文処理の実験を行った。その結果、解析器が距離的遠近により空所を埋めるという知覚方略ではなく、言語知識を参照して空所を埋めるという透明性の仮説が支持された。しかしながら、知覚方略などに見られる一般的な認知方略そのものが文処理の際に全く用いられていないとはいえない。つまり、知覚方略と言語知識との関わりについてまだ未解明な問題が多く残されている。ここでは、言語習得初期段階では、解析器は知覚方略を用いており、言語習得が完了すると言語知識を参照して文処理を行うという仮説を提案する。この仮説を検証するため、第1言語獲得の視点から、中国の小学生と中学生を対象とした実験を行い、知覚方略と言語知識との関係がどのようなものであるのかを考察した。

C.Chomsky (1969)は、英語母語話者である6歳から10歳までの子供を対象に行った実験の結果、Frazier *et al.*が主張した「最も近いフィラーの方略」と同じである Minimum Distance Principle を主張した。ここで、中国の6歳から10歳までの子供を被験者に、実験を行い、「最も近いフィラーで空主語を埋める」という結果が出たと仮定する。そうすると、個別言語の文法を習得する前の段階における processing の strategy は普遍的であると考えることができる。その strategy とは、たとえば、

Frazier *et al.*の「最も近いフィラーの方略」や C.Chomsky の Minimal Distance Principle のようなものである可能性がある。その後、個別言語の文法を習得してから、各言語に個別の strategy、たとえば、日本語の「主語/目的語優位仮説」、中国語の「動詞語彙情報の即時使用」などにより処理を行うと考えられる。さらに、成人と同じ文処理メカニズムが見られるかどうかを検証するため、中学生 1・2 年生を被験者に実験を行った。

#### 【結論・考察】

小学生の結果から、主文動詞をまだ習得していない段階では、解析器が知覚方略を用いており、主文動詞を習得している段階になると、言語知識を利用して文処理を行う段階に移行することが示唆された。よって、ここでは「文処理方略の移行仮説」を提案した。小学生よりも動詞の習得が進んでいると考えられる中学 1・2 年生を被験者に、成人と同じ文処理メカニズムが見られるかどうかを検証するため、実験を行った。中学校 1 年生の場合、主文動詞の語彙的信息が即座に使われるが、補文動詞が入力された際、空主語の処理も行うことから、成人の処理と一致しないことが考えられる。中学校 2 年生の場合、主文動詞が入力された際、解析器が即座に動詞のコントロール情報を用いて空主語の同定を行い、補文動詞が入力されたとき、空主語の同定が完了していることから、成人の空主語文処理プロセスと一致している。つまり、言語発達につれ、言語処理の方略も変化し、今回の実験から、中学校 2 年生(13 歳)ごろになると、ほぼ成人と同様の文処理メカニズムが働いていることが分かった。